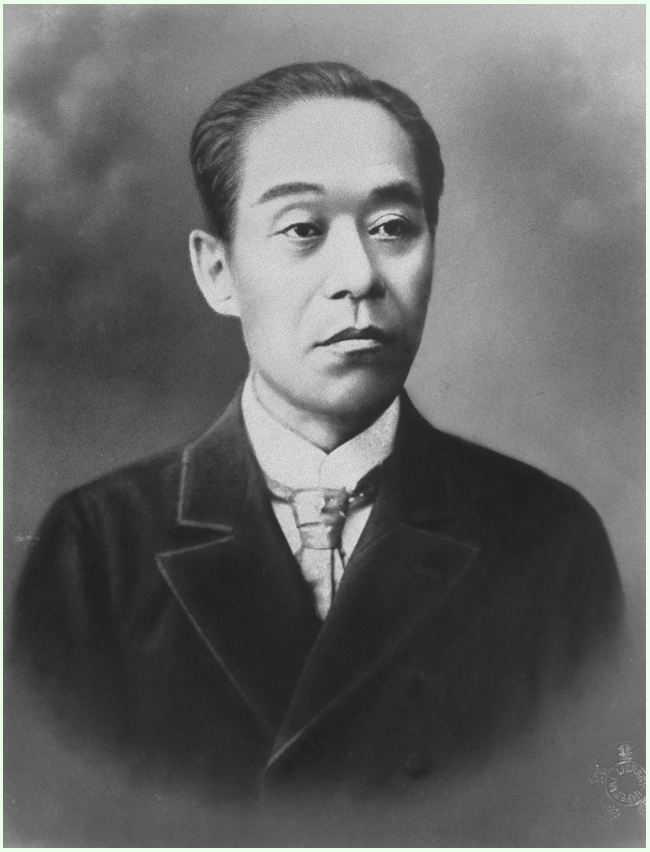
名誉顧問のコモンセンス

怨望論 4

『痩せ我慢の説』の謎を解く



個人攻撃の書

諭吉翁に、『痩せ我慢の記』（明治 24 年 1891 執筆•明治 34 年 1901没年「時事新報」に掲載）というのがあります。これは、明治維新が治まり、第一回帝国議会が開かれた翌年に書かれたもので、維新後に枢密院顧問を務め伯爵に叙された勝海舟と当時外務大臣の榎本武揚の二人の立場を珍しく個人攻撃でもって論評しました。諭吉翁が 56 歳のときに書かれたものです。諭吉翁と同時代の有名人二人の偉人に対する、これこそ諭吉翁の発した「怨望」であろうと思われるものです。どうして、諭吉翁ともあろう者が、二人の名士の名を挙げてこのような怨望の思いを得々と述べたのか、いつも不思議に思っていました。

宮仕えせず

諭吉翁は、常に政治と一線を画していました。本人自身は、「自分は教育者であり、教育経営者であり、啓蒙家である」と思っていたからです。（永井道雄）　『福翁自伝』でも、「役人になろうなどと考えたことはない」といっています。序列の厳しい役人社会で、無能な上司に無闇に使われることには我慢出来なかったのです。

少年の時から中津の藩を出て仕舞ったので、所謂、藩の役人らしい公用を勤めたことがない。夫（それ）から前にも云う通り、江戸に来て徳川の政府に雇われたからと云った所が、是れは云わば筆執る飜訳の職人で、政治に与ずかろう訳もない。只、職人の積りで居るのだから、政治の考えと云うものは少しもない。自分でもしようとも思わなければ、また私は出来ようとも思わない。仮令、又私が奮発して、幕府なり上方なり何でも都合のいい方に飛出すとした処が、人の下流に就ついて仕事をすることは固より出来ず、**中津藩の小士族で他人に侮辱・軽蔑けいべつされたその不平不愉快は骨に徹っして忘れられない**　から、今更、他人に屈してお辞儀をするのは禁物である。さればおおいに立身して所謂、政治界の大人（たいじん）とならんか、是れも甚々面白くない。前にも申した通り私は儀式の箱に入れられて小さくなるのを嫌う通りに、その通りに儀式張ばって横風（おうふう）な顔をして人を目下（もくか）に見下だすことも亦、甚々嫌いである。

富有家の諭吉翁

では、諭吉翁は、なんによって生計を立てていたのでしょうか？　諭吉翁は、ある友人への手紙で、「著作によって大金持ちになった」と富有の理由を明かしています。

「活計は読書翻訳を渡世といたし、**随分家産も出来**、富有の一事に至りては在官の大臣参議など羨（うらや）むに足らず、不羈の平民自由自在、唯、政府の法を守りて此の世を渡り申し候」

ここで諭吉翁が「著作で財を築いた」と言っているのはむろん、当時超ベストセラーとなった『学問のすゝめ』の出版です。ただ本を書いただけではなく、出版もしたのですから。これなら本が売れれば売れるほど収入は多くなります。丸儲けです。翁自らが、金銭において「怨望」からは自由であったと思われます。

著訳書に古来の文章法を破って平易なる通俗文を用うる事なり。凡そ是等は当時の古風家に嫌われる事であるが、幸に私の著訳は世間の人気に役じて渇する者に水を与え、大旱（たいかん）に夕立のしたようなもので、その売れたことは実に驚く程の数でした。時節の悪いときに、ドンな文章家ドンな学者が何を著述したって何を飜訳したって、私の出版書のように売れよう訳はない。畢竟、私の才力がエライと云うよりも、時節柄がエラかったのである。又その時代の学者達が筆不調法であったか、馬鹿に青雲熱に浮かされて身の程を知らず時勢を見ることを知らなかったか、マアそのくらいの事だと思われる。兎にも角にも **著訳書が私の身を立て家を成なす唯一の基本** になって、ソレで私塾を開いても、生徒から僅かばかりの授業料を掻き集めて私の身に着けるようなケチな事をせずに全く教師等の所得にすることが出来た。その上に、折々私の財嚢（ざいのう）から金を出して塾用を弁ずることも出来ました。

政治家と学者

翁には、『学問の独立』という論文があります。この論は、政治家と学者の違いを述べたものです。冒頭は以下の文章で始まります ―

学問も政治も、その目的を尋ぬれば、ともに一国の幸福を増進せんとするものより外ならずといえども、学問は政治に非ずして、学者は政治家に異なり、けだしその異なるゆえんは何ぞや。学者の事は社会・今日の実際に遠くして、政治家の働きは日常人事の衝(しょう)にあたるものなればなり。これをたとえば、一国はなお一人の身体の如くにして、学者と政治家と相ともにこれを守り、**政治家は病にあたりて治療に力を用い、学者は平生の摂生法を授くる者の如し**。開闢(かいびゃく)以来今にいたるまで、智徳ともに不完全なる人間社会は、一人の身体いずれの部分か必ず痛所(いたみどころ)あるものに異ならず。治療に任ずる政治家の繁忙なる、もとより知るべし。然るに学者が平生より養生の法を説きて社会を警(いまし)むることあれば、あるいはその病(やまい)を未発に防ぎ、あるいはたとい発病に及ぶも、大病にいたらずして癒(いゆ)るを得べし。すなわち間接の働きにして、学問の力もまた大なりというべし。

政治家には世の中の病を治す役目があり、学者には身体を鍛えさせる役目があるというのです。さすが、教育者であり啓蒙家である諭吉翁、上手いことをいいます。

それで、翁の結論は次のようです —

> 公平にいえば、政事も学問もともに人事の至要にして、双方ともに一日も空しゅうすべからず。　**政事は実際の衝にあたって大切なり。学問は永遠の大計を期して大切なり。**　政事は目下の安寧を保護して **学者の業を安からしめ**、学問は人を教育して **政事家をも陶冶** し出(い)だす。双方ともに毫(ごう)も軽重あることなしとの裁判にて、双方に不平なかるべし。

この結論も見事です。政治と学問、双方お互いに花を持たせて、両者の優劣を見事に捌(さば)いた名奉行です。ここにも、悪者の「怨望」が出る幕はありません。

『痩せ我慢の説』の謎を解く

実より名　「痩せ我慢」とはなにかといえば、世に、「名より実をとる」と言う言葉がありますが、「痩せ我慢」とはその反対で、「実より名をとる」ことをいいます。この場合、「名」とは、「名誉」であり、「正義」であり、「真実」であり、儒教で言う「五常」(仁・義・礼・智・信)のことです。「忠義」「孝」(親をだいじにすること)「悌」(てい:年長者に従順なこと・兄弟の仲が良いこと)もそうです。「実」とは、金銭や資産であり、名誉や地位のことです。名をとっても、なにもいいことはありません。何の得(とく)にもなりません。でも、世の中面白いもので、「名」を捨てれば必ず「実」もなくなります。そのためには、時には、「痩せ我慢」も必要なのです。

背に腹は代えられぬ　「名より実」と同じような諺に、「背に腹は代えられぬ」というのがあります。戦国時代に出来たものと思われます。負け戦なので、「この際、背中を切られるのは仕方がないせめて、大事な腹だけでも守ろう」と苦渋の選択をするのです。二者択一に迫られて、「名を捨てるか実を諦めるかとなったらこの際、実を取ろう」と決めます。「どうせ、身体を斬られるなら、腹は守って背中を斬らせよう」と決めるのです。ただ、結果は大いに違います。「腹」は守っても、「名」(名誉や正義や真実)を捨ててはいけません。人生、時にあっては、痩せ我慢は必要なのだ — と諭吉翁はいうのです。まさに、「背に腹を代える」苦渋の決断をするのです。さあ、困りました。

なぜ、「貧窮・困窮は怨望の源ではない」のか

もう一つの謎は、諭吉翁が、なぜ、「怨望は貧窮・困窮をもって怨望の源ではない」とか、「富貴は怨の府に非ず、貧賤は不平の源に非ざるなり」とか、「怨望」の原因を金銭問題から遠ざけようとしたのか ― です。これは、当時のベストセラーになった『学問のすゝめ』を書いた理由であり、『文明論之概略』やついには『痩せ我慢の説』にその答えあり ― というのが私の意見です。

先進国である諸外国の脅威にさらされて、自由や経済や侵略を知らない鎖国の民である日本人は、優れた文化と強い権力を持つ光栄の国々にへつらい頭を下げる**「奴隷根性」**を、勝と榎本の二人の例を見て、諭吉翁は「怨望」として恐れたのです。「以て瞑すべし」（もってめいすべし）です。

立国は私なり　振り返ると、この諭吉翁の『痩せ我慢の説』は、次のような文章で始まっていますす。読み始めたとき、「なぜ、このようなことを言い出したのか」「なにが言いたいのか」「なにを言おうとしているのか」がさっぱり分かりませんでした。

立国は私なり、公に非（あらざ）るなり。地球面の人類、その数億のみならず、山海天然の境界に隔られて、各処に群を成し各処に相分るは止むを得ずといえども、各処におのおの衣食の富源（ふげん）あれば、これによりて生活を遂ぐべし。

この出だしなら、「立国論」が始まるのかと思われます。ところが、そうであって、そうではないのです。

諭吉翁のリベラリズムの意義

或日（2023/11/27）、朝日新聞のオピニオン欄の「記者解説」を読んで驚きました。私のこの長年の疑惑が一掃されたのです。それは朝日の青山直篤報道部次長とアメリカの政治学者フランシス・フクヤマシ氏が「揺らぐリベラリズム」と題して対談したときの論稿でした。この二人の間で、突然、諭吉翁の『痩せ我慢の説』が話題になり、突然、諭吉翁の「リベラリズム」（自由主義）の捉え方を絶賛し始めたのです。そこでのお二人は、諭吉翁が論じた『痩せ我慢の説』から二つの意見に注目しています。すなわち、「**リベラリズムには共同体が必要**」であり、「**痩せ我慢は立国の根本たる士気である**」としていることに対しての同意です。

怨望に満ちた個人攻撃　この『痩せ我慢の説』は、明治２４年、諭吉翁が５６歳の時に書かれて、１０年後に「時事新法」に掲載されたものです。内容は、勝海舟と榎本武揚の立身出世について個人攻撃を行ったものです。「諭吉翁らしくない、怨望に満ちたものだ」と私は思っていました。

明治維新後、旧幕府の幕臣であった勝海舟と榎本武揚が、敵方の朝廷側の薩摩藩などが中心に作った明治政府の誘いに乗って、海舟は参議・海軍卿・枢密顧問官を歴任し伯爵に叙せられ、武揚は逓信大臣や文部大臣などになりました。二人は、これまでの敵方について、まんまと地位と名誉と財産を手に入れたのです。これは、幕府の忠臣であった諭吉翁にとって許せない背任行為でした。結局、次のような厳しい口調で結んでいます。なんとも、激烈な文章です。とても腹を立てています。

要するに二氏の富貴こそその身の功名を空しゅうするの媒介なれば、今なお晩（おそ）からず、二氏ともに断然世を遁（のが）れて維新以来の非を改め、もって既得の功名を全うせんことを祈るのみ。

諭吉翁は、なぜ、こんなに怒っているのでしょうか？　そのことを朝日での論説は、次のように解いて言います ―

> 19世紀のリベラリズムを体現した福沢諭吉は、**権力や利欲に負けず正義を貫こうとする痩せ我慢の精神を「立国の根本たる士気」とした。**　暴力の嵐が吹き荒れる今こそ、世界に通じる **信義と寛容を土台とした国民意識** が求められる。

そうなのです。諭吉翁は、彼ら二人の立身出世を「怨望」しているのではなく、「権力や利欲に負けず正義を貫こうとする精神」のなさを非難したのです。諭吉翁のまさに男らしい覚悟の表れです。正義を貫こうとする「痩せ我慢の精神」の前では、この二人の幕臣は裁かれてもしかたがありません。彼らは、権力と利欲に負けて、朝廷方に魂を売ったのです。「いま、国民全体に信義と寛容が求められるのに、この二人は、真っ先にこの二つを抛(なげう)ったのだ」と非難したのです。この二人こそ、「怨望」の持ち主なのです。

特に、朝日新聞での論者の一人フランシス・フクヤマ氏はその名著『歴史の終わり』で、「国際社会では、民主主義と自由経済が、社会の平和と自由と安定をもたらし、最終的に勝利して歴史の変遷も最後を迎える」といいました。「民主主義によって、他国民への差別意識が軽減され、村民、町民、市民、国民と発達してきた同胞意識が世界市民まで拡大していく」と説くのです。国民に信義と寛容を求める諭吉翁に共鳴しているのです。

共同体は必要　　さて、さらには、この『痩せ我慢の説』の難解な冒頭の文章です。この朝日の論説には、次のような文章も出てきます。

> **リベラリズムは、何らかの「共同体」がなければ存在できない**　ことだ。共同体は地縁や血縁、信仰、伝統的な道徳観といった **前近代的とも映る価値観** が支えている場合もある。リベラリズムの理念との間で時に緊張をはらむが、共同体の結びつきがなくなればリベラリズムを育む基盤も崩れてしまうのだ。

諭吉翁の言は、前近代的な「共同体」の考え方に則っています。それは、この『痩せ我慢の説』で、日本の「立国」のことを考えていたからです。国を変えることではなくて、まず、国を興すことを考えていたのです。これは、欧米列強への脅威を前にしての諭吉翁の愛国心と危機感から生み出されたものです。リベラリズムは、本来、「**道徳・義務・正義といった価値を重視し、個人主義や利己主義の危険性**　を踏まえたものだった」と「朝日」のこの論説はいいます。

共同体の根本　　旧幕府の重臣や従臣たちの精神は、古い前近代的な「共同体」の武士の組織や農民の農村組織を支えてきました。その精神を失った二人の個人主義者で利己主義者である旧幕臣は、古い共同体を破壊するものです。諭吉翁が望む、リベラリズムの基づく新しい共同体である日本を作ることにも反します。痩せ我慢の精神こそ、**「立国（共同体）の根本たる士気」**なのです。この諭吉翁が、『痩せ我慢の説』の最初に、「共同体」（独立した日本）について論じたのはそのためだったのだ ― と「朝日」の論説を読んで気がつきました。迂闊(うかつ)でした。それで、諭吉翁は、あえて勝と榎本の二人を弾じたのです。単なる個人的な「怨望」ではありませんでした。

国際的な協力が必要

新しい日本の基となる「共同体」について、リベラリスト(自由主義者)でナショナリストの諭吉翁は、国民だけでなく、国際的な対話や情報を重視します。其れを裏付ける意見が、これも「朝日」の論壇で聞けました。他日（2025/04/25)、イスラエルの歴史家ユヴァル・ノア・ハラリが述べたことです。至当な意見です。

「**人類の力は、個々の知性からではなく、大規模な協力によって生まれます**。月へ行くにしてもワクチンを開発するにしても協力に依存しています。この協力のためには情報が重要です。民主主義を可能にしたのも新しい情報技術です」

ハラリは、いまの国際情勢を見て、民主主義の危機を訴えます。そして、人間同士の協力と意見の交換が如何に大切かから話が始めます。

「**民主主義とは対話による合意形成** です。しかし何百万の人が何千キロにわたって広がっている状態では対話は難しい。だから大規模な民主主義はなかなか生まれませんでした。しかし、新しい情報技術が生まれ、新聞を皮切りに、その後ラジオやテレビ、そしてインターネットが登場します。それによって、広い範囲で人々が対話することが可能になった。外交政策や経済政策を議論できるようになった。これで多くの人や組織が意思決定に関与できるようになったのです」。

情報科学の発達により、国際的な対話と意見の交換と幾つかの共同体の設立が可能になった現代を悦びます。でも、科学化が進みすぎて、一方で、「偽の人間」まで登場してきている民主主義の現状に危機をいだいています。反民主主義的な独裁者の出現と権威主義の台頭です。

対話と命令　「しかし近年、この人間同士の対話に ＡＩ などのエージェントが大量に入り込み影響を与えている。『偽の人間』によって民主主義の土台が崩されています。民主主義の土台が対話だとすれば、独裁は命令です。権威主義体制では、すべての情報が1カ所に集中し、そこで意思決定が下され、指示として送り返されます。非常に単純です。だから歴史上ほとんどの大規模な社会は権威主義で運営されてきました」

自己修正能力の有無　「この情報の流れのほかにも民主主義と権威主義の間の重要な違いがあります。『自己修正能力』があるかどうかです。本来誰しも間違いは犯すのに、権威主義体制では『独裁者は天才で完璧。決して間違えない』という前提があります。民主主義では選挙で交代させることができる。自由な報道や学問によって批判することができる。独立した裁判所が間違った決定を覆すこともできる。　**この自己修正能力のおかげで民主主義国家は、間違いを特定して、修正していくことでより繁栄してきました。**しかし民主主義は今、魅力を失っているように思えます。最大の問題は、政府の権力を抑制する唯一の実質的な機関が最高裁判所しかないということです」。

アメリカでは、この重要な最高裁判所の判事を自分の親派から選んで任命しています。これではまったく形無しです。まさに、民主主義の危機です。これはその国・一国の問題であると当時に、国際的な問題です。反対するその国の国民の抵抗が必至です。

有効な国際秩序の崩壊　「21世紀初頭の国際秩序は、ある重要な原則の上に成り立っていました。『強い国が、単に自国の方が強いからといって弱い国を侵略することは許されない』というルールです。もちろんこの国際秩序にも問題はありましたが、歴史上最も平和な時代を生み出しました。今、この秩序は崩壊しつつあります」

「帝国主義的な国際秩序が標準となれば、多くの国は『生き残るためには強くならないといけない』と感じ、医療や教育の予算を削って軍事費を増やすでしょう。人類全体にとって壊滅的な結果を招く事態になるかもしれない」

まさに、いま、そのときがきているのです。

【2025/04/09　都築正道】